

明治21年7月に天理教会本部がおぢばに移転され、名実ともに教会本部が定まると、郡山や山名に始まる分教会設置の流れが起こった。明治22年1月14日、増野正兵衛ら兵庫真明組も本部に願書を提出し、翌15日に大阪真明組、大阪明心組に続いて「おさしづ」を仰ぎ、兵神分教会の設置をお許し頂いた。ただし、その願書には教会の場所や会長が明記されておらず、引き続き「おさしづ」を仰ぎながら決定していった。増野正兵衛に関するその頃の「おさしづ」を見ていきたい。

- ・明治22年1月15日午前9時20分：大阪真明組分教会設置の伺
- ・同日（陰暦12月14日）：大阪明心組より分教会所御許し願
- ・同日午前10時：神戸兵庫真明講より天理分教会設立の儀、端田久吉、富田伝次郎、清水与之助、増野正兵衛総代にて御許し願／兵庫の富田伝次郎所有の地所にて御許し下さるか、又は神戸の松田常蔵の地所にて御許し下さるか伺／幽冥理を押し伺
- ・同日：増野正兵衛目かい障り伺／同日、押し一時の処地所に建築致す方宜しきや、又は借宅にしておいた方宜しきや伺
- ・1月20日：増野正兵衛目かい足のくさ障り伺
- ・1月21日（陰暦12月20日）：清水与之助目かい障り伺
- ・1月23日：増野正兵衛足のくさ目かい障り伺

明治22年1月15日、まず大阪真明組が「おさしづ」を伺うと、「先ず今の処、世上の処、一つ理を持たねばならん。…さあへ許そへ」と、世上の動きに合わせたことが示唆されながら芦津分教会の設置が許された。次に、大阪明心組が伺うと、「…さあへ神一条の道はこれからや…。掛かりは先ずへ秘っそへにして運ぶ処、さあへ許そうへ」と、今後の神一条の道への期待とともに、最初は小さいところから始めるようにと船場分教会の設置が許されている。そして、続いて正兵衛ら神戸兵庫真明講も伺った。同じように「世界一つの理」や「神一条運ぶ一つ理治まる」などの言葉を頂きながら、「これまで明らかという理尽す治まる処、許そうへ」と兵神分教会の設置が許されている。

その上で、設置場所に関して「兵庫の富田伝次郎所有の地所にて御許し下さるか、又は神戸の松田常蔵の地所にて御許し下さるか」と伺うと、「どちらへこちらへとは言えん。心の理を寄せ、尋ね一つ理受け取る理である」と仰せられ、最後に「幽冥一つ理を知らそう」とお言葉があった。「幽冥一つ理」について押し伺うと「さあへ幽冥とこゝに一つ言えば分かるであろう」と仰せられたが、もう一つ判然と悟れなかったであろう、場所を決定することは出来なかった。

同日、正兵衛は「目かい障り」でも伺っている。「何が間違うてある。思う心が間違うてあるから速やかならん」と、端的に心のあり方が論されている。また、押し教会を建築する方がいいのか、借宅のままの方がいいのかと伺うと、「真実

一つ理、これまでどうせにやならん、こうせにやならんとは言わん」と具体的な指示ではなく「真実一つ理」を論された。「代々どんな事も、今の今見える、来年見える、だんへ日々見える」と、今回の目の障りに対応するようなお言葉も見られる。おそらく、先案じせず先を楽しみに見るよう論されていると思われる。

5日後の1月20日、正兵衛は、今度は「目かい」に加えて「足のくさ障り」についても合わせて伺っている。「しいかりどうでも定め切れば身も速やか、家内の身も速やか」と、案じ心を出さずにしっかり心を定めるよう論されている。このとき、家内の人にも何か身の障りがあったのであろう。一度は決心したことでも、周りの意見を勘案するうちに揺れ動いていたことが想像される。

この頃、清水与之助も同じように目を患っていたようである。次の日（21日）に「目かい障り」で伺うと「これまで運ぶ理、何か万事心尽す。又々あちらこちらだんへ忙しいへ。運ぶ理が増すと、「あちらこちら」と忙しくなるが、その中でもおぢばに運べばそれだけ「運ぶ理が増す」とのお言葉を受けた。また、「どちらこちらへどう聞いて運ぶ処、一つに治めてくれるよう」と、事情について談じ合いを重ねてみんなの心を治めるよう論されている。正兵衛は23日、再び「足のくさ目かい障り」について伺った。教会の事情や家内の事情について、「心一つ理上どうであろう、一つ案じる理上どうであろう」と案じ心についてふれられて、前回同様に「心変わらんのが定めやで」と論されている。

「くさ（瘡）」

さて、『身上さとし』では、「皮膚・くさ」の項目で、増野正兵衛の20日と23日の「おさしづ」が取り上げられている。20日のお言葉については「目と足のくさ障りは、先案じせず、おぢばに住込むことを、しっかりと心定めせよと指示されたのであろう」と述べられている。23日に関しても「心が変わらないのが本当の心定めである。という意味で、身上は心定めを確乎不動のものにせよと、重ねてさとしていられるのであろう」と述べている。そして『くさ』については、丁度症状が示すように、むしろしゃしている心の状態、即ちいんねんに心ひかれて、理一条に立ちきれず不足勝ちでいるところを、あざやかに理の上から思案して、どこまでも理が立つようにつっぱって行けということを示していられる」とまとめている⁽¹⁾。

正兵衛に関するこの頃の背景としては、おぢばへの移転とともに、兵神分教会の場所や会長の問題があった。正兵衛もいろいろと心を揉んでいたことであろう。清水与之助の「目かい障り」に対するお言葉に比べて、正兵衛に対しては「思う心が間違っている」とはっきり論されていることや、案じ心について再三論されていることが印象的である。

[註]

(1) 深谷忠政『教理研究身上さとし—おさしづを中心として』天理教道友社、1962年、249～250頁。